

比喩文の親しみやすさと解釈多様性の構造

平 知宏 (sakusha@syd.odn.ne.jp) † ‡

楠見 孝 (kusumi@mbox.kudpc.kyoto-u.ac.jp) †

† 京都大学大学院 教育学研究科 ‡ 日本学術振興会

本研究は、比喩文から想起される解釈の多様さに焦点を当てることで、比喩文理解における主題と喩辞の類似性認知の問題について言及することを目的とする。比喩文の主題と喩辞の類似性の認知が強い時、比喩文からは多様な解釈が想起されることがわかっている。だが、従来の研究では比喩文それ自体の性質としての類似性や解釈の多様さについて言及することはあっても、比喩文を理解する個人の認知過程の問題として類似性認知の過程や解釈の産出過程について言及することは少なかった。本研究では、個人が親しみのある比喩文を理解する際には、実際に多様な解釈を想起することを、文章読解課題を用いて実験的に示した。

問題と目的

“(主題)は(喩辞)だ or ようだ”形式の比喩文の理解は、様々な過程を経て達成されると考えられている。その中でも重要なものの1つとして、主題と喩辞の類似性を発見する過程がある。従来の研究の多くは、こうした類似性認知の過程に関わる比喩表現の要因とは何であるかについて検討したもので、類似性認知の強度が比喩文の処理過程や直喩と隠喩の表現形式の選好性の問題とも深く関わる(Bowdle & Gentner, 2005; Gentner, Bowdle, Wolff, & Boronat, 2001; Jones & Estes, 2006)。

類似性認知の強度が高いということは、主題と喩辞の間から発見される類似点・共通点が数多くあり、かつそれらが適切なものであると強く認知されていることを示す。例えば、Utsumi (2007)は、解釈多様性(interpretative diversity)が類似性認知を媒介して比喩文の直喩・隠喩形式の選好に影響を与えることを示している。彼らのいう解釈多様性とは、解釈を構成する意味の個数と、意味の顕現度の高さによって決定されるものである。特定の比喩文から想定される解釈が少ないということは、主題と喩辞を結びつける根拠に乏しく、類似点に改めて注目する必要があることから、“(主題)は(喩辞)のようだ”といった直喩形式を用いる必要性があることを示す。逆に比喩文の解釈多様性が高いことは、主題と喩辞を結びつける根拠に富むと同時に、解釈多様性が低い場合に比べて主題と喩辞の類似点が多く、“(主題)は(喩辞)だ”といった隠喩形式として用いやす

いことを示す。

しかし従来の研究では、類似性認知を個人の認知処理の問題というよりは、比喩文それ自体の性質として捉えることが多い。すなわち特定の主題と喩辞の組合せから多くの共通点・類似点が発見可能かどうかを問題にすることはあっても、比喩文を理解している個人が、実際に主題と喩辞間に多くの共通点・類似点を発見しているかどうかを問題にすることは少なかった。

そこで本研究では、比喩文の理解における主題と喩辞の類似性認知の問題について、個人が比喩文を理解する過程の観点から検討することを目的とした。この時の類似性認知の問題は、実際に比喩文から多様な解釈が想起されるかどうかをはかることで検討することが可能である。平・中本・楠見(2007)では、比喩表現の親しみやすさと主題-喩辞間の類似性認知の問題について検討している。彼らの述べる「親しみやすさ」とは、特定の語句の使用頻度などに対応した表現それ自体の熟知性を指す。彼らは、親しみのある比喩は理解される時、個人は1つの表現に対し多くの解釈を許容する一方で、親しみのない比喩の理解では、親しみのある比喩に比べ、多くの解釈が許容されないことを示した。このことは、親しみのある比喩の理解過程では、個人は主題と喩辞間に多くの類似点を発見しているが、親しみのない比喩の理解過程では、主題と喩辞の類似する点をそれほど多く発見していないことを意味する。ただし彼らの研究は、特定の比喩文に対しいくつかの解釈を呈示し、比喩文の解釈として適切なものを実験参加者に選択させ、その個人ごとの反応を多次元尺度法により処理したものである。いわば、比喩文

の理解の最中・直後において、実験参加者が多くの解釈を想起させていたかどうかは不明である。この点について、本研究の実験では、比喩文と関わるような文を複数含んだ文章の読解の過程に対し、比喩文の理解が及ぼす効果を測ることで検討した。

実験

先行研究から、親しみのある比喩の理解時には主題と喩辞の間に多くの類似点を発見し、多くの解釈が想起されるのであれば、文章中に出現する比喩文と関連する全ての文に対して等しく影響を及ぼすことが予測される。一方で親しみのない比喩は、主題と喩辞の類似点の発見が少ない。また平・中本・楠見(2007)によれば、親しみのない比喩から想起される解釈は、個人内で一義的なものになりやすく、親しみのある比喩と比べて少ない。そのため、親しみのある比喩とは異なり、比喩文の理解の影響は、比喩文との関連がとくに強い文のみであることが予測される。

方法

材料 平・中本・楠見(2007)で使用された親しみのある比喩 5 文(人生はギャンブルのようだ・言葉は武器のようだ・悲しみは海の底のようだ・時間はお金のようだ・恋は病気のようだ)、親しみのない比喩 5 文(親しみのない比喩:議論は建築物のようだ・知識はアクセサリのようだ、酒は恋人のようだ、結婚は冷蔵庫のようだ、学力は貨幣のようだ)を用いた。また、各々の比喩文に対して、それらが適切となるような文脈となる 10 の文章を作成した(例として表 1 参照)。

文章は 14 の文で構成された。そのうち第 5 文目は、比喩文が入る箇所であった。また第 6 文目と第 10 文目は、比喩文から産出される解釈をもとにした文で構成された。このうち第 6 文目は比喩文の解釈として特に強く関連する文であり、第 10 文目は比喩文の解釈としての関連がやや弱い文であった。比喩文との関連度は、平・中本・楠見(2007)から、比喩文の解釈として適切なものとして選択された比率をもとにした(関連度強 0.7-0.9; 関連度弱 0.2-0.4)。

手続き 実験は文章読解課題と文章再生課題の 2 課題で構成された。また文章読解課題は初読フェイズと再読フェイズとにわかれ、参加者は同

じ文章を 2 回読むよう求められた。

文章読解課題では、PC のディスプレイ上に実験材料を一文ずつ呈示し、スペースキーを押すことで文が消え、次の文が呈示されるようプログラムを行った。実験参加者に対し、呈示された文を

表 1: 材料文「議論は建築物のようだ」

1	今日は週に一度のゼミの日だった。
2	今日のテーマは、人によって意見が大きく分かれるであろう、少し特殊なものだった。
3	私が指定討論者の担当でもないので、今日はのんびりと見物するような気でした。
4	しかし、いざゼミが始まると、A さんと B さんが大激論を交わし、そうもいかなかった。
5	その時の彼らの議論は、まるで建築物のようなものだった。
6	彼らは、自分達自身の意見をどんどん組み立てていった。
7	時折意見が食い違いぶつかることもあったが、それも有意義なものだった。
8	ここまでエキサイトするゼミは、本当に久しぶりだった。
9	気がつけば、ゼミに参加していた人たちのほとんどが、各自自分の意見を述べていた。
10	その時の議論は、多くの人たちによって作られていたのだ。
11	授業終了の時間が来るのが、本当にあっという間だった。
12	教授の「今日はこれまで」という言葉が、とてももったいなく思えた。
13	「続きはいつもの居酒屋でやりましょう」と教授が言った瞬間、歓声があがった。
14	今夜別件で先約の入っていた私は、とても残念な気持ちになった。

“自分のペースで”読むように教示を与えた。初読フェイズでは、材料の第 5 文目に無意味な文字列(XXX)が表示され、参加者は“XXX にどんな文が当てはまるかを自由に想像しながら読むよう”教示を与えられた。実験材料 10 文章を全て読み終えた後に、偶発課題として参加者は同じ文章をもう一度読むよう求められた(再読フェイズ)。再読フェイズでは、参加者は初読フェイズと同様自分のペースで文章を読むように求められた。ただし、再読フェイズでは、参加者間要因として材

料の第5文目が初読フェイズと同様無意味な文字列が出現する条件(文字列条件)と、適切な比喩表現が出現する条件(比喩文条件)とに分けた。再読フェイズ終了後、文章再生課題を行った。

文章再生課題では、参加者に材料文章が印刷された冊子を渡した。材料文章は、第5・6・10文目が空欄になっており、参加者は空欄に当てはまる文を再生するよう求められた。なお第5文目に関しては、文字列条件で再読フェイズを読んだ参加者は文章読解課題時に想像した文を書くように、比喩文条件で読んだ参加者は再読フェイズ時に読んだ文を再生するよう求められた。

参加者 日本語を母語とする大学生・大学院生47名を対象とした。文章読解課題の再読フェイズ時に文字列条件で読んだ参加者は24名、比喩文条件で読んだ参加者は23名であった。

結果と考察

結果の処理 文章読解課題の結果については、各々の材料ごとに、第6文目、第10文目それぞれの読解時間を、各々の文のモーラ数で割った値を求めた。ここから得られたデータに対し、再読フェイズ時のデータから初読フェイズ時のデータを引くことで、個人内の再読の効果求めた。この値は、同一文章の再読時の読解時間が初読に比べてどれだけ短縮されたかを示す指標であり、値が大きくなるほど初読よりも素早く文章を読んだことを示す。この時、 $\text{平均値} \pm 2SD$ となった値は、はずれ値としてデータから除外した。

文章再生課題の結果については、材料ごとに第6文目と第10文目が再生されたかどうかを検討し、再生された場合1点として、各条件の総合得点を求めた。

再読による読解時間の促進 文章の再読の効果の結果は図1の通りとなった。再読時の第5文目の比喩文提示の有無(文字列条件 vs. 比喩文条件)を参加者間、読解した文の比喩との関連度(第6文:比喩との関連度高 vs. 第9文:比喩との関連度低)を参加者内要因とし、2要因分散分析を行った。親しみのある比喩の場合、再読時の比喩文提示の有無の主効果が有意傾向となった($F(1, 45)=3.00, p<.10$)。このことから、比喩文の理解により、解釈と関連する文は読解時間が促進されたことが示された。第6文と10文を除いた第6文以降のその他の文の再読の効果は、文字列条件

で12.7ms($SD=9.2$)、比喩文条件で18.7ms($SD=14.6$)となり、両条件間での差はなかったことから($t(45)=2.80, n.s.$)、比喩文の効果は解釈と関連する文のみに見られたと考えられる。

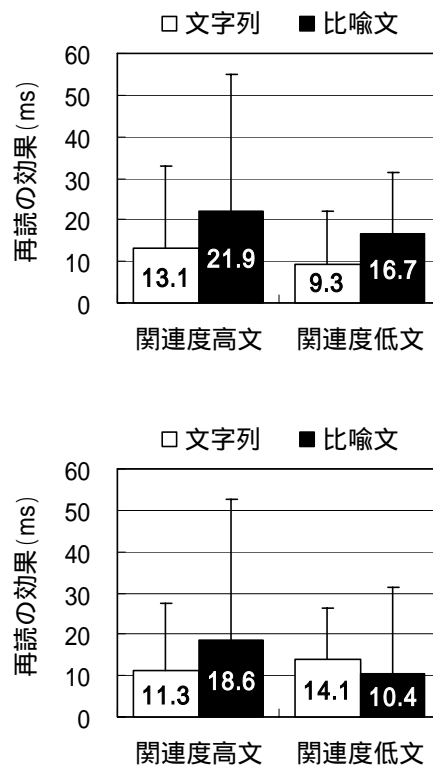


図1. 文章再読時の効果

*上: 親しみのある比喩 下: 親しみのない比喩
エラーバーはSD

親しみのない比喩についても、親しみのある比喩と同様に、再読時の比喩文提示の有無と読解した文の比喩との関連度の2要因で分散分析を行った。その結果、2要因の交互作用が有意となった($F(1, 45)=4.48, p<.05$)。下位検定の結果、第6文は文字列条件よりも比喩文条件の方が再読時に素早く読まれることがわかった($F(1, 90)=3.71, p<.10$)。また、再読時比喩文条件において、第6文は第10文よりも素早く読まれることから($F(1, 45)=4.10, p<.05$)、親しみのない比喩文提示の効果は、解釈との関連度が強い場合にのみ生じることがわかった。ただし、第6文と10文を除いた第6文以降のその他の文の再読の効果は、文字列条件で16.1ms($SD=7.9$)、比喩文条件で21.1ms($SD=10.9$)で、両条件間での差に有意な傾向が見られたことから($t(45)=3.02, p<.10$)、比喩文の効果は比喩とは関係しない文にも働きうる可能性が

示唆された。

再生課題の成績 再生課題の成績結果は図3の通りとなった。再読時の比喻文提示の有無(文字列条件 vs. 比喻文条件)を参加者間、読解した文の比喻との関連度(第6文:比喻との関連度高 vs. 第9文:比喻との関連度低)を参加者内要因とし、2 要因分散分析を行った。親しみのある比喻の場合、2 要因の交互作用が有意であった($F(1, 45)=5.84, p<.05$)。下位検定の結果、親しみのある比喻を用いて読んだ場合、比喻と強く関連する文である第6文目を、比喻を用いなかった場合よりも多く再生したことがわかった($F(1, 90)=4.96, p<.05$)。このことから、親しみのある比喻文は、特に比喻と最も関連するような情報をもとに文章読解後の記憶を形成することが示唆された。

一方、親しみのない比喻の場合、読解した文の比喻との関連度のみが有意であり($F(1, 45)=5.84, p<.05$)、比喻文提示の有無や2 要因の交互作用は有意とならなかった。このことから、文章読解後の記憶表象の形成に、比喻文の理解は有意に働かないことが示唆された。

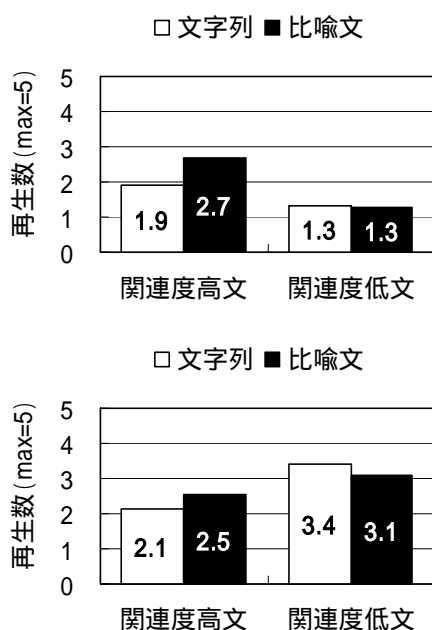


図3. 文章読解後の再生課題の成績

*上:親しみのある比喻,下:親しみのない比喻

考察

文章読解課題と再生課題の結果から、次のことが示唆される。親しみのある比喻文であれば、1つの比喻表現から多くの人間で共有されるような多様な解釈が想起され、それらを同時に処理す

ることが可能となる。このことは仮説である「親しみのある比喻文は、個人内で多くの解釈を想起させる」ことを支持し、主題と喩辞間に強く多様な類似性を認知していることを実験的に明らかにした。更に、親しみのある比喻表現の理解は、比喻文と強く関連する情報を元に記憶表象を形成することを示した。

それに対して、親しみのない比喻文では、比喻と強く関連するような解釈しか想起されず、想起される解釈の数が少ないという意味合いで、主題と喩辞の類似性認知の強度は低いと言える。比喻表現が理解されている時、個人の中では主題に対する局所的な理解しか達成されておらず、文章中で主題となる語に関連付けられた様々な情報を統合する際に、大きな利益は生じないと考えられる。

なお、本実験のデザインでは比喻との関連度が高い文を第6文目、低い文を第10文目として、出現位置を固定している。このことから、本実験の結果は、親しみのある比喻は、それ自体に関連する情報の保持において時間経過の影響を受けない、とも説明できる。この点に関しては、今後追加実験を行うことで、比喻理解の構造を検討していく必要がある。

引用文献

- Bowdle, B., & Gentner, D. (2005). The Career of Metaphor. *Psychological Review*, *112*, 193-216.
- Gentner, D., Bowdle, B. F., Wolff, P., & Boronat, C. (2001). Metaphor is like analogy. In D. Gentner, K. J. Holyoak, & B. N. Kokinov. *The analogical mind: Perspectives from cognitive science*. The MIT Press, pp. 199-253.
- Jones, L., & Estes, Z. (2006). Roosters, robins, and alarm clocks: Aptness and conventionality in metaphor comprehension. *Journal of Memory and Language*, *55*, 18-32.
- 平知宏・中本敬子・楠見孝 (2007). 比喻理解における親しみやすさと解釈の多様性. *認知科学*, *14*, 322-338.
- Utsumi, A. (2007). Interpretative diversity explains metaphor-simile distinction. *Metaphor & Symbol*, *22*, 291-312